

# 虎明本のテアル構文

## ——競合という観点から——

神永正史

キーワード：有生・無生性、文法化、動作パーフェクト、主体・対象変化動詞

### 要 旨

日本語の大きな変革期にあたる中世末期は、テンス・アスペクトにおいても、表現する意味毎に形式が全て定まっているわけではなく、幾つかの用法で競合がみられる。

本稿では、最初に、中世末期の口語日本語資料である狂言台本虎明本にみられる、アスペクトの意味を表す形式である「～てある」の各用法が、他のアスペクト・テンス形式である「～ている」や「～た」とどのように競合しているかをみる。次に、この競合が中世末期から近世前期にかけてどのような形に収束していくかを、同じ大蔵流宗家の台本である狂言台本虎寛本との比較を手がかりとし、近松の作品を資料にして考察する。その結果、この競合が近世前期のテアル構文の構成に影響していることを明らかにする。

## 1. はじめに

### 1.1 本稿のねらい

中世末は、日本語の大きな変革期にあたり、テンス・アスペクトにおいても、表現する意味毎に形式が固定しているわけではなく、幾つかの用法で競合がみられる。この時期のアスペクトの意味を表す形式（以下ではアスペクト形式と略す）

としては、まず、存在動詞に基づくものとして「～ている」と「～てある」の形式が盛んに用いられるようになった（以下、「～てある」「～ている」の各形式はテアル、テイルで総称する）<sup>\*1</sup>。そのほかに、テンス・アスペクト形式としては「～

---

\*1 存在動詞に基づくものとして、他に「～てある」の丁寧体である「～てござる（ござある）」等があるが、本稿では「～ている」との比較という点から、これらの形は扱わない。

た」(以下ではタで総称する)も用いられた。

中世末期の口語日本語を伝えるという大蔵流狂言台本虎明本にも、テアルとテイルを文末に含む構文が多数みられる(以下ではこのような構文をそれぞれ「テアル構文」「テイル構文」とする。また、タを文末に含む構文を「タ構文」とする)。本稿は最初に虎明本にみられるテアル構文の各用法をみていく。その際、この構文の主語・目的語にあたるもの、文末テアルの文法化、およびテアルの上接動詞、という3点に注目する。具体的には、主語・目的語についてはその有生・無生性、文法化については存在動詞「ある」との関係から、動詞についてはテアル構文のもつ「変化の結果状態の表現」という特質から、自・他および変化性、非変化性などの意味特徴を考察する<sup>\*2</sup>。特に、上接動詞の意味特徴の検討を中心として論を進める<sup>\*3</sup>。

次に、虎明本にみられるテアル構文の各用法と、テイル構文とタ構文の用法を比較し、これら3つの形式の間で、競合する用法をとりあげる。さらに、これらのアスペクト形式の間の競合が、中世末期から近世前期にかけてのアスペクト形式の変遷にどのように作用したかを、大蔵流直系の狂言台本虎寛本との比較を中心に、近松の世話浄瑠璃等を参照することにより考察する。

## 1.2 資料について

狂言の成立は、中世半ばにあたる14世紀後半であり、伝統芸能として、その台本には15世紀以降の口語要素が多分に盛り込まれている。しかしながら、一方において、狂言は舞台劇として常に観衆との交流の上に成り立つものであるから、同時に、新しい観衆の好みに応じてその時折の表現も取り入れていく面もあった。

虎明本(237曲)は1642年(寛永19年)に書写されたもので、代々宗家である大蔵家の口伝によってきた台本をここではじめて筆録したと記してあり、この筆録は台本の定着をめざしたものであることがわかる。それゆえ中世末期の口語を伝承しているとみられる点が多い。虎明本のテキストとしては、池田廣司・北原保雄著『大蔵虎明本 狂言集の研究 上、中、下』(表現社 1972)を使用し、大塚光信

---

\*2 テアル用法分類の際に有生・無生性、文法化に注目する理由については、拙稿2009を参照。

\*3 拙稿2009においても同様の手法でテアル構文の用法を分類し、テイル構文と比較したが、今回はテイルばかりでなくタ構文とも比較し、テアル、テイル、タのテンス・アスペクト3構文の競合という観点から、中世末期のテアル構文を総合的に考察した。

編『大蔵虎明 能狂言集 上、下』（清文堂 2006）を参考にした。

虎寛本（165 曲）は 1792 年（寛政 4 年）に書写されたもので、虎明本筆録以後の近世初期に筆録されたとされる狂言台本（大本）を書写したと記してあり<sup>\*4</sup>、この書写は台本の固定化をめざしたものであることがわかる。それゆえ、虎寛本に見られる虎明本との異なりは、書写当時（近世後期）の口語表現を反映したものというよりは、むしろ、虎明本以後の近世前期の口語表現を反映したものが多と思われる<sup>\*5</sup>。虎寛本のテキストとしては笹野堅校訂『大蔵虎寛本 能狂言 上、中、下』（岩波書店 1942）を使用した。

### 1.3 用例採取について

テアル構文の用例は、終止法ばかりでなく、連体節、条件節等、テアルの全ての形のものを採取した。用例の動詞を種類毎に分類する際には、上接する動詞が明らかに「動詞＋受身・使役の助動詞」のものは態（voice）の関係で、また「－ヲスル」の形のサ変動詞および「－ヲイタス」の形は自他の関係で、それぞれ不明確化を避けるため考察の対象にはしなかった（以下ではこのような例を「対象外の例」と呼ぶ）<sup>\*6</sup>。採取に際して会話文、（ト書きなどの）地の文の区別は特にする必要が認められないのでしなかった。なお、例文引用の際、句のくり返し記号（＼／）は用いないなど表記を改めたところがある。

### 1.4 用語について

以下では、本稿で用いる有生・無生（物）、文法化、主体・対象変化（動詞）という用語についてのべる。

有生・無生性は、主語・目的語などの名詞の性格についてのべるもので、有生物、無生物は、柳田 1991 等でのべられている従来の有情物、非情物とみなせるも

\*4 大本については「それ（虎明本）とは本文が相異したもので、近世初期、虎明本が書写されてから間もなく、大蔵流の狂言に近世的な刪定が加えられ、整理されたものを書留めたのがこの大本であつたらしきと思われる」（笹野 1942、小林 2000）とある。

\*5 但し、「丁寧語などを中心とするある種の表現に、幾分江戸中期以降の新しい語形・用法が取り入れられた、－後略－」（蜂谷 1977）という指摘もある。

\*6 例えば、虎明本のテアル構文の例では「悪逆をいたす」「大咎をいたす」（各 1 例、－ヲイタス）、「（骨を）折らせる」（2 例、＋助動詞）の 4 例を採取から除いた。

のである。

文法化 (grammaticalization) とは、例えば、補助動詞等に組み込まれた動詞が、本来の本動詞としての意味を失い、補助動詞の一部として機能していく過程を指すものである。テアルの場合はアルに本動詞のもつ存在の意味があれば文法化されていないことになり、存在の意味が薄れていくほど、文法化していることになる。具体的にのべれば、テアルの用法が、テアルのアルに本動詞である存在動詞の「ある」「いる」の意味を残し、「(～シタ (シテイル) 状態デ) ある・いる」の意味を表すものであれば、そのテアルは文法化されていないことになり、テアルのアルがそのような意味から離れて、テアル全体で (動作パーフェクト (経験、完成) や継続などの) 派生的な意味を表すものとなっていれば、そのテアルは文法化されていることになる。

主体・対象変化についてであるが、まず、変化には移動などによる位置変化、作成・出現などによる状況変化、質・形の変容による属性変化などがある。これらの変化動詞が自動詞の場合、主語にあたるものが変化の主体 (有生、無生物) となり、このような自動詞を主体変化動詞という。主体変化動詞のテアル構文の例を示す (波線部が変化の主体である)。

- (1) もはや (萩の花の) かたはしは、ちりがたになって、下におちて有がなを見事で、  
(虎明本 はぎ大名)

これらの変化動詞が他動詞の場合、目的語にあたるものが変化の対象 (典型的には無生物) となり、このような他動詞を対象変化動詞という。対象変化動詞のテアル構文の例を示す (波線部が変化の対象である)。

- (2) 色々の道具をあまたもたれて、(色々の道具を) ざしきにもどこにも取りちらして有と申程に、  
(虎明本 盗人の子)

## 2. 虎明本のテアル構文

### 2.1 テアル構文の自動詞

虎明本では、テアル構文の自動詞構文は 40 例あり (対象外の例なし)、そのうち、移動などを示す移動動詞 (「来る」「出づ」「参る」など) が 28 例 (自動詞の 70%、以下同じ)、質、形、位置などの変化を示す主体変化動詞 (「咲く」「たぎる」「落ちる」など) が 7 例 (18%)、それ以外の動作動詞 (「通る」「わらふ」など) が 4



例（10%）、状態動詞（「似る」）が1例（2%）ある。

移動動詞が上接したテアル構文は動作パーフェクト（経験、完成）（以下動作パーフェクトと略す）を表す<sup>\*7</sup>。

(3) 扱はなんちが（一のくひに）と（疾）ふきてあるよな （牛馬）

主体変化動詞の上接したテアル構文は主体の変化の結果状態を表す。

(4) しやくやくの花が、人のうらにみ事に、さひてあるをみて、 （どひつ）

動作動詞の上接したテアル構文は動作の進行を表す。

(5) はりまのいなみ野をとをつてあれは、おほきな牛がふせつておつて、  
（ほうじやう）

状態動詞が上接したテアル構文は単純な状態を表す。

(6) きやつがき（着）たゑほしをみれば、ちんじゅほころの、いがきににて有  
程に、 （今まいり）

文の主語をみると、例文(3)(5)は主語が有生であり、例文(4)(6)は主語が無生であるが、主体変化動詞が上接した(4)には有生主語の1例がある。(7)として示す。

(7) （民は）そくさい（息災）に成てはあれ共、みかどげきりんましまして  
（鶏猫）

また、例文(3)(5)のテアルの用法は、テアルのアルに存在の意味のない派生的用法のものであり、テアルが文法化されている。例文(4)(7)は、主語の状態を表すテアル構文で、テアルのアルに存在の意味があり、テアルは文法化されていない。なお、(6)の「似てある」の動詞「似る」は、動作も変化も含意しないものであり<sup>\*8</sup>、本稿であつかうアスペクト形式としては異質なもののなので、本稿では単にこの一例の存在のみをしるすに留め、以下では、この動詞にはふれないこととする。

---

\*7 移動動詞も（位置）変化動詞であるが、虎明本で用例の多い有生物の移動を示す動詞類は、全て動作パーフェクトを表すので、「移動動詞」として独立して分類した。

\*8 「状態動詞＋タ、テアル、テアリ」は慣用的な状態叙述表現といえるものであろう。

## 2.2 テアル構文の他動詞

テアル構文の他動詞構文は 45 例あるが、このうち対象外の 4 例を除いた 41 例が分類の対象となる。動詞は行為者の意志的動作を示すが、これらの動詞は、(動詞の示す) 行為が対象に対して何らかの変化を及ぼすか、及ぼさないかによって大別される。前者は行為対象の変化の結果状態をのべたものであり、後者は行為者 (= 動作主) の状態についてのべているか、行為の遂行そのものをのべることに主眼をおくものであり、行為による対象の変化にはふれていない。前者は対象変化動詞である。後者は一般的な総称がないので、仮に対象無変化動詞と呼ぶことにする。

### 2.2.1 対象無変化動詞

対象無変化動詞 (33 例、全他動詞の 81%、以下同じ) としては、最初に主語にあたる動作主の状態についてのべているものとして、感覚機能を示す知覚動詞 (「聞く」「見る」など) が 9 例 (22%)、発話に関する発話動詞 (「云ふ」「申す」など) が 8 例 (20%)、知的な認識を示す認識動詞 (「案ずる」「推量する」など) が 5 例 (12%)、持続的行為を示す持続動詞 (「持つ」「待つ」など) が 3 例 (7%) ある。

知覚動詞を上接したテアル構文は動作パーフェクトを表す。

(8) (夜半に相手の声を) しかときひてある、かくさずにいへ (くらままいり

発話動詞を上接したテアル構文も動作パーフェクトを表す。

(9) やい、兩人の者ようきけ、兩人ながら一字一点ちがはずよう申してある。

(茶つぼ)

認識動詞が上接するテアル構文も動作パーフェクトを表す。

(10) 「なんぢが此所へきたつて有を、びしやもん天王が、きつと推量してある

ぞとよ」

「何とすいりやうしたぞ」

(ゑびす毘沙門)

持続動詞の上接するテアル構文は維持状態を表す。

(11) 某はあきんどのつかさをもつて有により、

(酔はじかみ)

次に、同じ対象無変化動詞に含まれるものであるが、行為の遂行そのものをのべることを主眼とする動詞として、事態に対する処置、処理を表す動詞 (仮に「処置動詞」としておく) として、「求める」「つけ知らせる」などが 8 例 (20%) ある。

これらの動詞が上接したテアル構文は動作パーフェクトを表す。

- (12) 汝が留守に、太刀をもとめてあるみせう (空うで)

文の主語を見てみると、例文(8)～(12)は主語が有生である。また、テアルの文法化の点からみてみると、例文(8)(9)(10)(12)のテアルは派生的用法のものであり、テアルは文法化されている。例文(11)のテアルは主語の状態を示しており、テアルは文法化されていない。

### 2.2.2 対象変化動詞

対象変化動詞（8例、20%）としては、配置や設置を意味する動詞（仮に「配置動詞」とする<sup>9)</sup>）として「打つ（「立てる」の意味）」「取り散らす」など3例（7%）、新たな場での作成・生産を意味する動詞（仮に「作成動詞」とする<sup>10)</sup>）として「書く」「こしらへる」の2例（5%）、質的・形状的变化を示す質的・形状的变化動詞として、「殺す」「しとめる」など3例（7%）ある。配置動詞は移動による位置変化を表し、作成動詞は新たな場面での作成・生産を意味する一種の状況変化を表し、質的・形状的变化動詞は属性変化を示すものである。

配置動詞(13)、作成動詞(14)の例文を示す。

- (13) (猫の) ゆくゑを申て来り候はは、くんこうはこうによるべしと、高札を  
うちてある、 (鶏猫)  
(14) なむよろい、なむよろい、是になにやらかひてある (よろい)

質的・形状的变化動詞のテアル構文は、行為者がガ格で、行為対象がヲ格で示されて、動作パーフェクトを表している。

- (15) 某ひさうのねこを、汝がころひてある間、こんきをはねうずると存、(鶏猫)

文の主語について見てみると、例文(15)の主語は有生である。例文(13)(14)は主語（＝動作主）がなく、ヲ格（または無格）で示された目的語（＝対象）は無生

\*9 「配置動詞」の名称は益岡 1987 を参考にした。

\*10 拙稿 2009 ではこの種の動詞を「出現動詞」としたが、他動詞としての性格を明確にするため「作成動詞」と呼称を改めた。なお、「こしらへる」が上接するテアル構文は、対象がガ格をとっているが、是は書写時（近世初期）の口語を反映したものと思われる。

である。また、文法化の点からみると、例文(15)のテアルは派生的用法のものであり、文法化されている。例文(13)(14)のテアルは行為対象の変化の結果状態を示しており、文法化されていない<sup>\*11</sup>。

### 2.3 動作パーフェクトのモーダルな意味

次に、虎明本のテアルが「荘重さ」ともいうべきモーダルな意味も含む件についてであるが、この件に関しては幾つかの先行研究でのべられている。柳田 1991 (pp.217-218) は、

主格が有情物である場合に用いられた「テアル」の例を見てみると、それらは、神仏や大名・目代・奏者などが荘重さをもたせて語る会話に用いられることが多く、文語色を帯びて来ていたのではないかということである。

とのべている。また、金水 2006a (pp.273-274) も同様なことをのべ、「これは、「～である」の一部の用法が、古風な言い方になってきていることを表しているものと考えられる」としている。柳田 1991 ((16)) と金水 2006a ((17)) で示された例文は次の2つである。

(16) 汝がいのをかけし、ひえいざんの大黒でんにてあるが、一中略一三郎どのといひあはせて、きたりてあるぞ。(夷大黒)

(17) 某は三面の大こくにてあるが、一中略一福をあたようと思ふて是まで出てあるよ。(大黒連歌)

これらは、いずれも(3)と同じく、移動動詞が上接する動作パーフェクトの用法のものである。また、例文(10)の認識動詞が上接する動作パーフェクトの用法のものも(16)(17)と同様にモーダルな意味を含んだものであるといえる。

---

\*11 この構文は、(13)を例にとれば、「高札をうちてある」は、行為の結果として「高札が(うたれて)ある」の意味となり、アルが存在の意味をもち、変化物の有り様(＝変化の結果状態)を表すことになる。

### 3. テアリと競合する他のアスペクト形式

中世末期から近世初期にかけての時期は、日本語の大きな変革期にあたり、テンス・アスペクトにおいても、表現する意味毎に特定の形式が固定化しているわけではなく、テアル、テイル、タの構文の間で競合がみられる。

#### 3.1 タ構文

虎明本のタ構文には、テンス的な過去を表す用法と、アスペクト的な状態を表すという2つの用法がみられる。ここでは、これら2つの用法とテアル構文との競合関係についてのべる。

##### 3.1.1 過去を表す用法

タ構文の主語が有生で過去を表す例を示す。(18)は自動詞の移動動詞であり、(19)は他動詞の知覚動詞である。

- (18) ざとう（座頭）になつてきた (三人がたは)  
 (19) 「今のをきひたか」「中ゝきゝまらした」 (茶つぽ)

虎明本にはテアル構文で、主語が有生で、テアルが文法化された用法のうち、動作パーフェクトを表すものが51例（テアル構文の69%）みられる<sup>\*12</sup>。テアル構文の大部分を成すこの動作パーフェクト用法は、例えば、例文(12)で過去を示す時の副詞句「汝が留守に」が用いられていることや<sup>\*13</sup>、次のように、タ構文とテアル構文が同じ過去を示す意味で使われている箇所がみられることなどから、テンス的にタ構文と競合していたものと思われる。

- (20) 「いやわごりよは、何としてきた」  
 「身共はかたわ物かゝへらるゝと云に付てきてある」 (三人がたは)

(20)と同様な例としては(10)もあげられる（波線部がタで過去を表す）。

- (10) 「なんぢが此所へきたつて有を、びしやもん天王が、きつと推量してあるぞとよ」

\*12 虎明本には、主語が無生物で、動作パーフェクトと思われる例は、みうけられなかった。

\*13 他に過去時の副詞句と共に起している例は、「頼くらてあるか」（ぶんざう）がある。

「何とすいりやうしたぞ」

(ゑびす毘沙門)

### 3.1.2 状態を表す用法

タ構文では、アスペクト的な変化結果の状態を表す用法がある。その中に、主体・対象が無生で、主体変化動詞と対象変化動詞の上接する変化の結果状態を表す例文がみられる。(21)は主体変化動詞であり、(22)は対象変化動詞(作成動詞)の例である。

(21) それ左の手があいたは (こぶうり)

(22) 誠にあれはすみ絵にかひたよ (酔はじかみ)

虎明本では、例文(1)(2)(13)(14)のように、主体・対象が無生で、主体変化動詞、対象変化動詞の上接する変化の結果状態を表す例が、合計 11 例みられる。これらは(21)(22)のようなタ構文とアスペクト的に競合していたものと思われる。

### 3.2 テイル構文

ここでは、テイル構文とテアル構文との競合関係についてのべる。

虎明本の全てのテイル構文は、主語は有生で、テイルが文法化していない<sup>\*14</sup>。その中に、自動詞の主体変化動詞や、他動詞の持続動詞が上接するものがみられる。(23)は主体変化動詞の、(24)は持続動詞の例文である。

(23) わたくしのやしやじ(夜叉神)になつていて、とめようがござる  
(いしがみ)

(24) かのもものおちぼうずが、此山一つあなたに、寺をもつていらるゝが、  
(つりきつね)

中世末期の存在動詞「ある」は「いる」「ある」の両方の意味を有していたので、テアル構文の主語が有生でテアルが文法化していない(7)の「成つてある」は、(23)の「なつている」と、また(11)の「もつてある」は(24)の「もつている」と同じ意味にとれる。このように、テアル構文でも、主語が有生で、テアルが文法化してい

---

\*14 虎明本のテイル構文については拙稿 2009 を参照。

ないものは、意味上テイル構文と競合していたものと思われる<sup>\*15</sup>。

#### 4. 3つのアスペクト形式の競合のながれ

3でのべた虎明本にみられるテアル、テイル、タの3アスペクト形式の競合のゆくえをみるため、大蔵流直系の狂言台本虎寛本（1792年書写）と、近松門左衛門による世話浄瑠璃・歌舞伎狂言本25作品（1702~1722）をみていく<sup>\*16</sup>。虎寛本は近松作品より後に書写されたが、1.2でのべた理由により近松作品よりも先にみていく。

##### 4.1 タ構文との競合のながれ

###### 4.1.1 過去を表すタ構文

虎明本におけるテアル構文の動作パーフェクトの例文(3)(8)(9)(10)(12)(15)のうち、モーダルな意味を含む(10)や曲（鶏猫）がない(15)をのぞいた文にあたる箇所を、虎寛本でみていく。(3)(8)(9)(12)（再掲）と比較して示す。

(3) 扱はなんちが（一のくひに）と（疾）ふきてあるよな (牛馬)

(25) すれば汝が先へ来たが定か。 (虎寛本 牛馬)

(8) （夜半に相手の声を）しかときひてある、かくさずにいへ（くらままいり）

(26) 慥に聞た。つゝまずといへ (虎寛本 くらまゝいり)

(9) やい、兩人の者ようきけ、兩人ながら一字一点ちがはずよう申してある。

(茶つぼ)

(27) 一段と能ういふた。利非をわけてとらせう。 (虎寛本 ちやつぼ)

(12) 汝が留守に、太刀をもとめてあるみせう (空うで)

\*15 持続動詞は次例のようにタ構文でもみられる。この動詞についてはテアル、テイル、タという3つのアスペクト形式が競合していたことになる。

身どもは雲の上のきんとうさえもと云て、山だちのおゆるしの文をもつた、

(きん藤左衛門)

\*16 近松の作品中調査した個々の作品名については、＜調査・参考文献名＞に記してある。

(28) 扱汝がいた跡で能い太刀を求た。見せう程に夫に待て。

(虎寛本 そらうで)

(25)～(28)で示されたように、虎明本の動作パーフェクトは、虎寛本ではタ構文を用いて表現されている。

さらに、近松の 25 作品に現れる 19 例のテアル構文をみると、動作パーフェクトの用例は見当たらない。

これらのことから、虎明本のテンシ的な過去を表す用法では、タ構文とテアル構文の動作パーフェクトとが競合していたが、近松の作品が刊行された 18 世紀初頭までにはタ構文で表すようになった可能性がある。

次に、2.3 でのべた、虎明本のテアル構文の同じ動作パーフェクト用法のうち、「莊重さ」ともいうべきモーダルな意味を帯びたものについてであるが、このモーダルな用法の例文(10)(16)(17)にあたる箇所を虎寛本でみていく。(10)(16)(17)(再掲)と比較して示す。

(10) 「なんぢが此所へきたつて有を、びしやもん天王が、きつと推量してあるぞとよ」

「何とすいりやうしたぞ」

(ゑびす毘沙門)

(29) さぶ此所へ来て有を、此毘沙門天王の急度御推量被成て有るぞとよ。

(虎寛本 えびすびしやもん)

(16) 汝がいのりをかけし、ひえいざんの大黒でんにてあるが、一中略一三郎  
どのといひあはせて、きたりてあるぞ。(夷大黒)

(30) 是はひえい山三面の大こく成るが、三郎殿と我は一所に有るもの成れば一  
中略一現れ出て有るぞとよ。(虎寛本 えびす大こく)

(17) 某は三面の大こくにてあるが、一中略一福をあたようと思ふて是まで出てあるよ (大黒連歌)

(31) 三面の大黒天、是まで現れ出て有るぞとよ。(虎寛本 大黒連歌)

(29)(30)(31)は同じ動作パーフェクトでありながら(本来なら「へた」に置き換えられるべきところを)、(25)～(28)とは違って、(10)(16)(17)の例文同様テアルを用いて表されている。このことから、(10)(16)(17)のような文のテアルは、



他の動作パーフェクトと違って、特定の発話者にのみ用いられるモーダルな意味を含んでいる特殊な形として後代の狂言台本に伝承されたものと思われる<sup>\*17</sup>。

#### 4.1.2 状態を表すタ構文

虎明本では、例文(1)(2)(13)(14)のように、主体・対象が無生で、変化結果の状態を表す主体変化動詞、対象変化動詞の上接する例がみられるが、このうち、虎寛本では、(1)(14)にあたる箇所は叙述内容が異なり、(13)は曲（鶏猫）がない。(2)のみ該当する箇所があるので、(2)（再掲）と比較して示す。

- (2) 色々の道具をあまたもたれて、（色々の道具を）ざしきにもどこにも取りちらして有と申程に、(虎明本 盗人の子)  
 (32) さればこそ是にはや色々道具が取散いてある。(虎寛本 こぬすびと)

(32)では（対象のとり格助詞がヲからガに変わっているが）虎明本同様に対象変化動詞（配置動詞）がテアルに上接する形を保っている。

また、状態を表すタ構文の例文(21)(22)は虎寛本では、以下の(33)(34)で示すように、テアルを用いて表されている<sup>\*18</sup>。(21)(22)（再掲）と比較して示す。

- (21) それ左の手があいたは(こぶうり)  
 (33) 是、こちらの手が明て有る。(虎寛本 昆布うり)  
 (22) 誠にあれはすみ絵にかひたよ(酢はじかみ)  
 (34) 誠にみな墨繪に書て有るは。(虎寛本 すはじかみ)

---

\*17 手坂 1999 では「テアルは主に対話中で上位者から下位者に使われ、威重さを伴う表現として用いられたのではないだろうか」と述べているが、論者は「莊重（威重）さを伴うテアルは特定の話者によってのみ用いられたモーダルな表現」とみなしている。

\*18 同じ状態を表すタ構文で、有生主語のものがテイルで表されている例もみえる。

- ・さらは汝がつばならは、さだめてあの入日記をしらぬ事はあるまひ、しつたか(虎明本 茶つば)
- ・茶壺成らば入日記が有うが、知てゐるか。(虎寛本 ちやつば)

さらに、近松の作品に現れる 19 例のテアル構文をみると、主体が無生の主体変化動詞が 8 例、対象が無生の対象変化動詞が 8 例の合計 16 例で、全体の 84 % を占めている。主体変化動詞の例(35)と対象変化動詞（配置動詞(36)、作成動詞(37)）の例を示す（(36) (37)の対象がとる格助詞は(35)と同じくガとなっている）。

(35) 袖から背中が、ハア、たとと腫れてあるわいの (近松 心中万年草)

(36) 上から帯が下げてある、長持も出してある。

(近松 ひぢりめん卯月紅葉)

(37) いやいや、これにはわしが本名が書いてある。

(近松 丹波与作待世のこむろぶし)

これらのことから、主体・対象が無生で、主体変化動詞と対象変化動詞が上接する変化の結果状態を表す用法は、虎明本ではタ構文とテアル構文が競合していたが、18 世紀初頭までには、テアル構文で表すようになった可能性がある<sup>\*19</sup>。

#### 4.2. テイル構文との競合のながれ

虎明本では、例文(7) (11)のように、主語が有生で、自動詞の主体変化動詞や他動詞の持続動詞の上接する例が、合計 4 例みられる。このうち、(7)は虎寛本では曲（鶏猫）がなく、(11)にあたる箇所のみある。(11)（再掲）と比較して示す。

(11) 某はあきんどのつかさをもつて有により、 (酔はじかみ)

(38) 某は賣物の司をもつて居るに依て、 (虎寛本 すはじかみ)

(11)の虎明本ではテアル構文であるが、(12)の虎寛本ではテイル構文に変わっている。

さらに、近松の作品に現れる 19 例のテアル構文をみると、主語が有生で、自動詞の主体変化動詞や他動詞の持続動詞の上接する例は見当たらない。

---

\*19 4.1.2 から明らかなように、テアル構文においては、近世前期頃までに、現代日本語のテアル構文の大部分を占める「無生物ガ＋対象変化（他）動詞＋テアル」という統語形態が徐々に形成されてきたことがわかる。

これらのことより、主語が有生で主体変化動詞や持続動詞が上接する（変化の結果）状態を表す用法は、虎明本ではテイル構文とテアル構文が競合していたが、18世紀初頭までには、テイル構文で表すようになった可能性がある。

## 5. アスペクト形式の文法化

虎明本ではテアル構文の大部分が文法化し、そのほとんどが動作パーフェクトである。拙稿 2007 では、平安中期のテアル構文にも動作パーフェクト（経験）の存在を認めているが、数としては少ないものであり、テアル構文の表現内容が時代と共に大きく変わってきたことが窺える。この動作パーフェクトは中世末にはテンス的な意味を帯び、近世では、タ構文に取って代わられたので、テアル構文では、文法化した用法は（モーダルな意味を有するもの以外は）消失し、逆に、文法化しなかった用法は残ったといえる<sup>\*20</sup>。

虎明本にみられるタは、アスペクトの助動詞「たり」が原形であり、古くは発話時での状態を表す用法が主であったが、中世末以降はテンス的用法で盛んに用いられ、テンス化（＝文法化）しなかった用法は、テアルとは逆に、衰えていった<sup>\*21</sup>。このように、テンス化に関しては、テアルとタでは中世末期以降は結果が逆に現れたことになる。

以上のべてきたテアルとタのこのような変遷からみると、中世末においては、テンスとアスペクトの境目は、現代語におけるほど明確ではなかったように思える。

テアル構文で、文法化されたものは、他に有生主語で自動詞の動作動詞で進行を表す(5)の用法の4例がある。進行を表す虎明本の4例は、その例が記載されている曲自体が虎寛本にない。また、近松の作品に現れる19例のテアル構文をみても進行の用法は見当たらないので、進行の用法が後代でどのような形式になったのか確かなことがいえない。

---

\*20 テアル構文で、文法化しなかった用法のうち、対象変化動詞の構文を、平安中期のそれと比較すると、対象の無生物化、動作主の意味からの後退がみられ、内容が質的に変わってきていることがわかる。質的变化におけるこの2つの流れは、この動詞のテアル構文の変遷に一貫してみられるものである。平安期のテアル構文については拙稿 2008 を参照。

\*21 テンス化しなかった状態を表すタの多くはテイルかテアルに代わられていったことになる。但し、タの状態を表す用法が全て衰えたわけではなく、連体用法として現代日本語にも多く見られる。

## 6. 本論のまとめ

本稿は、狂言台本虎明本において、テアル構文の各用法が、他のアスペクト形式とどのように競合していたか、さらに、これらの競合する形式が 18 世紀初頭の近世前期までにどのような形に収まっていったのかを、虎明本と虎寛本という狂言台本間の差異を手がかりとし、近松作本によって補って考察した。その考察の結果は以下のようにまとめることができる。

- ① テアル構文の大部分を成す、主語が有生の動作パーフェクトの用法は、テンス的用法のタ構文と競合していたが、タ構文に取って代わられた。
- ② 主語（＝主体）と目的語（＝対象）が無生の、主体・対象変化動詞の変化の結果状態を表すテアル構文は、アスペクト的用法のタ構文と競合していたが、テアル構文で表すようになった。但し、対象がとる格助詞はヲ（または無格）からガに変わっていった。
- ③ 主語が有生の主体変化（自）動詞の変化の結果状態を表すテアル構文や、同じく主語が有生の持続（他）動詞の維持状態を表すテアル構文は、テイル構文と競合していたが、テイル構文に取って代わられた。

## 引用・参考文献

- 神永正史 2006 「平安中期のテアリ ータリとの比較からー」『筑波日本語研究』11号 筑波大学日本語学研究室
- 2007 「動詞の類型とテアリ文の意味」『筑波日本語研究』12号 筑波大学日本語学研究室
- 2008 「平安中期のテアリ文における他動詞構文について」『日本語と日本文学』47号 筑波大学日本語日本文学会
- 2009 「中世末期以降のテアル構文 ー狂言台本虎明本を主資料にしてー」『日本語と日本文学』49号 筑波大学日本語日本文学会
- 金水 敏 2000 「1 時の表現」『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』仁田義雄・益岡隆志篇 岩波書店
- 2006a 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
- 2006b 「日本語アスペクトの歴史的研究」『日本語文法』6巻2号
- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト ー現代日本語の時間の表現ー』ひつじ書房

- 此島正年 1973 『国語助動詞の研究 体系と歴史』 桜楓社
- 小林賢次 2000 『狂言台本を主資料とする中世語彙語法の研究』 勉誠出版
- 坪井美樹 1976 「近世のテイルとテアル」『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』  
表現社
- 手坂凡子 1999 「虎明本狂言のテアルについて」『国語研究』62 國学院大学
- 蜂谷清人 1977 『狂言台本の国語学的研究』 笠間書院
- 福岡健伸 2002 「中世末期日本語の～タについて 一終止法で状態を表している  
場合を中心に一」『国語国文』71-8
- 益岡隆志 1987 『命題の文法』くろしお出版
- 柳田征司 1987 「近代語「テアル」」『愛媛国文と教育』19 号
- 1991 『室町時代語資料による基本語詞の研究』 武蔵野書院
- 山下和弘 1996 「中世以後のテイルとテアル」『国語国文』65-7
- 湯澤幸吉郎 1929 『室町時代言語の研究』大岡山書店（風間書房より復刊、1955）
- 1936 『徳川時代言語の研究』刀江書院（風間書房より復刊、1962）

#### 調査・参考文献

- 『大蔵虎明本 狂言集の研究 上、中、下』池田廣司・北原保雄著 表現社 1972
- 『大蔵虎明 能狂言集 上、下』大塚光信編 清文堂 2006
- 『大蔵虎明本狂言集総索引 1～8』北原保雄・他篇 武蔵野書院 1982～1989
- 『岩波文庫 大蔵虎寛本 能狂言 上・中・下』笹野堅校訂 岩波文庫 1942
- 『古典文庫 大蔵虎光本狂言集 一～四』橋本朝生編 古典文庫 1990
- 『新編日本古典文学全集 近松門左衛門集 1～2』鳥越文蔵他校注・訳 小学館 1997
- （この中には調査資料とした次の人形浄瑠璃 24 作品が収められている。「曾根崎心中」  
「堀川波鼓」「五十年忌歌念仏」「丹波与作待夜のこむろぶし」「冥途の飛脚」「夕霧阿  
波鳴渡」「大経師昔暦」「鑓の権三重帷子」「博多小女郎波枕」「心中天の網島」「女殺  
油地獄」「心中宵庚申」「薩摩歌」「ひぢりめん卯月紅葉」「追跡心中卯月の潤色」「淀  
鯉出世滝徳」「長町女腹切」「山崎与次兵衛寿の門松」「心中二枚絵草子」「心中重井筒」  
「心中万年草」「心中氷は刃の朔日」「今宮の心中」「生玉心中」）
- 『新日本古典文学大系 近松浄瑠璃集 上、下』松崎 仁他校注 岩波書店 1993～1995
- 『日本古典文学大系 歌舞伎脚本集 上』浦山政雄他校注 岩波書店 1960
- （この中には調査資料とした次の歌舞伎狂言 1 作品が収められている。「傾城壬生大念  
仏」）

『筑波日本語研究』 第十四号 筑波大学 人文社会科学研究科 日本語学研究室 2009

『近松門左衛門 近世文学総索引』近世文学総索引編纂委員会編 教育社 1986

かみなが せいし／人文社会科学研究科

(2009年10月30日 受理)